

牧師さん

内藤 真理子

私の第一印象は「突き抜けている！」だった。

まだ学生時代、くつついて行った親友の同窓生の集まりでその人は光っていた。彼女の発する言葉、例えば、私の親友の名前は圭子と言ったが、その人は「ドド子さん」と呼んでいた。その言葉のセンスに圧倒された。

彼女は圧倒的に存在感があり明るかった。

それから幾星霜、その人は牧師になった。

大学を卒業して公務員になり、そこで知り合った人と結婚をし、幸せな家庭を築いた。一人娘にも恵まれ、彼女の性格を絵に描いたように、娘は伸び伸びと育ち、中学はミッションスクールに行きたいと夢に向かって突き進み、努力は報われ受験を制し中学生となった。

彼女が牧師になったのは、公務員を定年退職してからで、それから神学校に入学し、資格を取得してからだった。もう五十五歳を過ぎ、学生に交じって、ラテン語など新しいことを学ぶのは大変なことだっただろう。彼女はその困難を、学生寮に入りねじり鉢巻きで克服した。そして牧師になったのだった。

十一年前、私は親友達と一緒に、彼女が初めて牧師になった千葉の片田舎にある教会を訪れた。なりたての牧師に私は「どうして牧師になったの？女性の牧師なんて珍しいのにどうしてなれたの？」と、聞きたいことは沢山あったが、その教会はこじんまりした清潔な教会で、中には信者の方が作って下さったという、椅子に合わせた細長い手作りの座布団が納められた、感じの良い教会で、彼女を中心に気持ちよく運営されているのだと思ひ、何も聞かずに帰って来た。そして先日、あの、長閑な教会の長椅子に敷かれた手作りの座布団を思い出し、もう一度行って見たいと思ひ、親友を介してお願いして教会行きが実現した。

現在、後期高齢者の牧師を含めた三人の同窓生と、すっかり友達になった私は、彼女の住んでいる牧師館で、みんなで買って行ったお弁当を広げ、冗談を言い合いながら会わなかった来し方のことを話し、笑いあった。そして私は何のためらいもなくその人に聞いた。

「どうして牧師になろうと思ったの？」

彼女は一瞬沈黙した後、

「私が書いた『白い翼』の本を良かったら読んで」と言っただけだった。

それは、彼女の一人娘が中学校に入学してすぐに白血病に侵され、四年間の闘病の末に亡くなった記録だった。亡くなって四年経ってやっと完成した本だと言っていた。

以前、ギリシャ旅行で、世界遺産「メテオラの修道院」に行ったことがある。

ここには自然現象で出来た奇岩群があり、その天辺を包み込むように教会、修道院がいくつも建っていた。メテオラとは、ギリシャ語で空中に浮かぶ、という意味だそうだ。こんな断崖絶壁の上に建つ修道院や教会に身を置く人の気持ちには計り知れぬものではあったが、研ぎ澄まされた孤高のような超然としたものを感じたのを思い出した。

「前にここにいらしてから十一年経ったのね。あなたが来たと言って言ってくれなかったら実現できなかったのよ、ありがとう」

友達の友達である、厚かましい私に牧師さんが言ってくれた。

彼女は、出会った最初と同じように存在感があり、冗談ばかり言って私達を楽しませてくれた。私達はさんざんお喋りをしたあげく、テレビの朝ドラの話になり、奇しくも同じ男優を「ステキ！」と言って大いに盛り上がった。

帰る前に教会に行った。

綺麗に磨かれた教会に立つと清浄な空気に充たされた気分になった。祭壇があり、細長い椅子が何列も並んでいて、その椅子全部に手作りの細長い緑色の座布団が敷かれていた。

「信者さんが作ってくれたのよ」

祭壇の後ろの大きな十字架の前に立つ牧師さんが「孤高の人」に見えた。